

氏名(本籍)	おか 岡	よし 佳	こ 子(福岡県)
学位の種類	博士(芸術学)		
学位記番号	博乙第2408号		
学位授与年月日	平成20年11月30日		
学位授与の要件	学位規則第4条第2項該当		
審査研究科	人間総合科学研究科		
学位論文題目	近世京焼の研究		
主査	筑波大学教授	博士(芸術学)	守屋正彦
副査	筑波大学教授	博士(芸術学)	中村伸夫
副査	筑波大学准教授	Dr. Phil.	長田年弘
副査	筑波大学准教授	博士(文学)	八木春生
副査	根津美術館副館長	D. Phil.	西田宏子

### 論文の内容の要旨

#### (目的)

本論文は、近世京焼、すなわち桃山から江戸末まで京都市街地およびその周辺で焼かれたやきものの窯業的な変遷を文献史料と出土資料によって明確にし、そこに、野々村仁清、尾形乾山、奥田穎川、仁阿弥道八ら、京焼の名工たちの生涯と作品を位置づけ、近世京焼の特質を明確にすることを目的としている。

#### (対象と方法)

幕末からの研究史を検証し、出土遺物や関連文献から、技術系譜、産業的な展開、受容層のあり方や流通および市場の動向などを明確にしたうえで、京焼の伝世品を対象に分析する方法により、下記の章立てを行い考察を進めた。

序章 「京焼」研究史をめぐって

第一部 京焼とその創始(第1章～第2章)

第二部 本焼窯場の成立と仁清(第3章～第6章)

第三部 京焼の展開と乾山(第7章～第9章)

第四部 後期京焼の諸相(第10章～第13章)

終章 まとめにかえて

#### (結果)

序章では、「京焼は、近世初頭に京窯(登窯)が出現して以後のやきもの」であるとの従来の「京焼」概念が、明治の陶磁器産業の近代化によりその祖型が形成され、大正期の名工研究を経て戦後に成立していく過程を検証した。そのうえで、「京焼とその創始」では、従来「京焼」の範疇に含まれなかった楽焼を含めた低火度焼成の軟質施釉陶器の出土状況と茶会記を対照し、16世紀末から17世紀初頭に京都での生産が始まること、および登窯の導入の裏付けとなっていた17世紀初頭の茶会記の「京ヤキ」も軟質施釉陶器と指摘し、京都三条の瀬戸物屋を基点とする国焼と軟質施釉陶器の茶器流通も論じた。「本焼窯場の成立と仁清」では、瀬戸からの栗田口への登窯導入時期を1620年代であることを実証し、以後も軟質施釉陶器の生産が

継続して、これが「京焼」と呼称されたとの見解を提示した。17世紀中葉に開窯した野々村仁清の御室焼が、その初期に先行する粟田口焼と同様に茶入と高麗茶碗を主に生産したが、17世紀後期には色絵陶と茶碗生産へと移行した過程を伝世品を用いて明らかにし、また仁清色絵が、前代の京焼技術を基盤に肥前色絵の影響を受けて成立したことを指摘した。「京焼の展開と乾山」では、出土資料と文献から17世紀末までに洛外の群小窯場が没落し18世紀前期に洛東に窯場が集約され量産化が始まる状況を明確にした。清水焼の事例からは17世紀の寺院領主御用達の実相を論じ、伝世品と出土資料をもとに古清水色絵の編年を試み、また尾形乾山が17世紀末に仁和寺御用達窯を開いたが、洛中に移転し琳派意匠の懐石具を量産したと指摘した。「後期京焼の諸相」では、18世紀中期から後期にかけて、前代から続く粟田口と五条坂、清水の三所の窯業地に新興窯元が台頭し、信楽で京焼風の日用品生産が本格化する過程を論じ、その状況下に奥田穎川、初代清水六兵衛、仁阿弥道八が前代のやきものを復古しつつ独自の創意を加え、また19世紀に至ると穎川一門の陶工たちが地方に下向し京焼技術は伝播したが、国焼では独自の作風が展開したと指摘した。

(考察)

著者は近世の京焼の変遷を概観し、17世紀前半の登窯導入後、洛外の寺院領に逸品茶器を生産する群小窯場が成立した時期、17世紀末から18世紀前期に群小窯場が没落し分業により日用品を量産する大規模な窯場が洛東に成立した時期、18世紀後期に窯場が粟田口、清水、五条坂に三所に集約され、信楽で日用品生産が軌道に乗る時期の三期を京焼の展開期と捉えた。そして各期に仁清、乾山、穎川、六兵衛などが登場して、京焼の展開を牽引したと位置づけた。また京焼の特質は窯場から先進技術を導入するが、その作風を模倣せず、常に新規の意匠を生み続けたことであり、それは市場からの要求に対応したため、市場と窯場を結ぶ流通者の介入によって商品性の高いやきものが生産されたのが、京都という都市の窯場のあり方であると結論づけた。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

漆器、染織金工など他の工芸と比較して、陶磁器史研究では考古学の果たす役割が大きい。しかし京焼の場合、その窯跡が市街地に位置するため、瀬戸や肥前などに較べると生産遺跡の発掘は全く行われていない状況にある。近年、京都、江戸、各地の城下町の消費地遺跡の発掘が急速に進展し、京焼研究にその成果を取り入れることが重要な課題となってきた。しかし、未だこのような方向性を持つ研究が一般的となつたとは言いがたい。

著者は、考古学の成果を積極的に取り入れ、既存の文献を読み直し、多くの伝世品を分析した結果、通説とは異なる軟質施釉陶器の生産開始時期と登窯の導入時期を導き出した。仁清や古清水色絵の編年、乾山様式の成立などに関しても、提示された見解は新しいものである。また、京焼の変遷を概観し三期の展開期を提示したうえで、従来は独自の個性から生まれたとみられていた京焼陶工の作風を京焼窯業の展開に対応するものと位置づけた。さらに内外の諸窯場から先進技術を導入し常に新規の意匠を生み出し続けたことが京焼の特質で、それは流通市場の要求に応え市場と結ぶ流通者の仲介の存在によるものであり、京都という特殊な都市で、京焼諸窯は市場と密接に関わり、その動向を反映させた商品性の高いやきものを生産したとの結論を導き出したのである。

生産、流通、市場、或いは商品性などを、京焼の多彩な作風の出現の要因とする見解は、長年にわたり京焼対象に研究を進めてきた著者ならではの独自のもので、日本陶磁器史における先駆的な研究として有為な学位論文と認めることができる。

よって、著者は博士(芸術学)の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。